

資料

がんで子どもを亡くした母親の講演後における学生の感想 — 自由記述の収集と分類 —

新山悦子*¹ 梶原京子*¹ 忠津佐和代*¹

はじめに

近年の大学生は、現実の死に直面することがほとんどなく、兄弟姉妹も少ないため相手に共感する、相手の立場に立って考える等の能力が低下していることが指摘されている¹⁾。特に、死に直面した子どもや家族をケアする職業を希望する学生にとっての死の教育は、自らの死生観をもち、パニックになることなく落ち着いて死に直面する子どもや家族の気持ちに共感し、思いやりをもってケアでき、対人援助職者になる自分の課題をも見出すための重要な教育の1つである。

死の教育において第一人者である、アルフォンス・デーケンは、「死の教育」として大学生を対象に死をテーマに小論文を書かせる、自分が病で死ぬという想定のもとに残される人に別れの手紙を書かせる等の演習を行っている²⁾。また斎藤は、本を用いる、死別を経験した家族に講演を依頼する等で、死を真摯に受け止め、生命を大切にすることを考える教育を行っている³⁾。

今回、著者らは養護教諭養成課程の学生に対し、生の有限を知り、命の尊さを再確認すること、病気の子どもや、子どもと死別した家族の理解を深めること、対人援助職者を目指す自分の課題を見出すことを目的とし、がんで子どもを亡くした母親の講演を聴く機会を設定した。ターミナル期の子どもを抱えた親、特に母親は、子どもを失うかもしれないことへの恐怖と同時に、これから子どもが体験する苦痛を自分のことのように感じており、心理的ストレスが強いことが指摘されている^{4,5)}。キューブラー・ロスは「家族のことも合わせて考えなければ、本当に有意義なかたちで末期患者の力になることはできない。闘病中、家族は重要な役割を果たし、彼らの言動は、病気に対する患者の姿勢に大きく影響する⁶⁾」と述べており、養護教諭養成課程の学生には、家族への理解を深める教育が必要である。

そこで本研究は、対象者とその家族への理解を深め、学生自身の確固たる死生観を確立し、対人援助職者としての課題を見出すことを目的とし、養護教諭養成課程の学生における講演後の理解のあり様を知るために、講演内容の感想を構造化することを目的とした。

対象と方法

1. 対象と時期

対象者は、A大学における養護教諭養成課程の学生131名(保健看護学専攻79名、健康体育学専攻36名、その他9名、不明4名)で、性別等の記入漏れがある者を除いた120名(平均年齢21.26±1.78歳、男性11名、女性109名)であった。調査実施時期は、2004年7月12日であった。

2. 調査方法

講演は、子どもたちに死の教育を行っていく養護教諭養成課程の学生に対し、生の有限を知り、命の尊さを再確認すること、難病の子どもや子どもと死別した家族への理解を深めるために、がんで子どもを亡くした母親(以下、Tさんとする)の講演を聴く機会を設定した。講演の内容は、「がんで子どもを亡くした母親の発病時から現在までの自分の体験と気持ち、養護教諭、看護師に望むこと」であった。

調査方法は、まず調査者が養護教諭養成課程の学生に対し、がんで子どもを亡くした母親の講演前に協力依頼を行った。次いで、講演後にがんで子どもを亡くした母親の話の聴いて思ったことを記述する、自由記述による質問紙調査を実施した。質問紙の回収は、調査者がその場で行った。

倫理的配慮については、回答は無記名、かつ自由意志であり、回答しなくても回答者が不利益を被らないこと、回答の途中で止めてもよいこと、結果は授業評価には反映しないこと、プライバシーは保護

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科
(連絡先)新山悦子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-Mail: niiyama@mw.kawasaki-m.ac.jp

されること、本調査結果を研究的に分析すること、質問紙は研究終了後に調査者が責任をもって破棄すること等を口頭と文書で説明した。

3. 質問紙の内容

3.1. 基本的属性(年齢, 性別, 学科)

3.2. Tさんの講演後の感想(自由記述)

なお本研究における感想とは、学生が、がんで子どもを亡くした母親の話を聴いて感じたことを指す。

4. 分析方法

学生の感想は、過去の学生の経験や環境に基づいた個性的で複合的な性格のものであるため、本研究のデザインは帰納的質的研究とし、川喜田が提唱するKJ法^{7,8)}を用い、その手順に従って分析した。KJ法は、先入観や仮説、理論、希望的観測に合わせたものではなく、渾沌それ自体に語らせ、渾沌から秩序を作り、多様性を持つ現象に存在する主要要素や出来事とその概念間の関連を明らかにし、データに根ざした新たな発想や見解を展開することを目的としている⁷⁻⁹⁾。従ってKJ法は、現代の学生の感想を構造的に理解するのに有効であると考えられる。

分析は、以下の手順で行った。まず自由記述の回答を全て抽出し、ラベルに転記した。そして収集したデータから、文章または段落ごとに学生の感想の意味内容の類似性によってラベルを集め、その集合したラベルの本質が明らかになるまで内容を読み返し解釈し、概念化するという一連の作業を繰り返してカテゴリを生成していった。

次に、導き出されたカテゴリ、サブカテゴリを意味の関係性により配置し、関係を線で結びつけ図解化した。その間にも再びデータに戻り、妥当性を確認しながらカテゴリを収束し、精緻化していった。

分析の全過程は、授業担当者(養護教諭経験者)と研究者の2名で行い、データの信頼性と妥当性を高めるため、分析中に養護教諭の経験を持つ研究者に概念やカテゴリを提示し、確認、検討を行い、修正していった。また分析においては、KJ法の研究・指導に携わっている専門家にスーパーバイズを受けた。カテゴリ化は、3名の判断と解釈が一致するまで突き合わせを行った。最終的に明らかになったカテゴリ名や研究結果が妥当であることを確認した。

結 果

がんで子どもを亡くした母親の講演の感想は、3カテゴリ(カテゴリA, B, C), 7サブカテ

ゴリー(サブカテゴリa, b, c)に統合することが妥当と考えられた(表1)。以下、カテゴリ:【 】, サブカテゴリ:《 》, サブカテゴリの1段階前のカテゴリ: , 記述されたデータ:「 」で示す。

学生の感想の全体の構造は、以下のように分類された。さらに記述されたデータの中から象徴的な事項を引用し、各カテゴリについて文章化した。以下、各々のカテゴリごとに結果を述べる。

1. カテゴリA.【母親の講演内容と

活動の意味の理解】について(表1)

カテゴリA.【母親の講演内容と活動の意味の理解】は、サブカテゴリa.《子どもに寄り添うことで培われる母親の信念を知ることができた》, サブカテゴリb.《家族の辛さは、子どもへの深い愛が支えとなってグリーンワークを行い、気持ちの整理ができることがわかった》から構成されていた。

1.1. サブカテゴリa.《子どもに

寄り添うことで培われる母親の信念を知ることができた》について

学生は、「迫りくる死に怯えて、相当な苦痛を持っていたと思う」「白血病になった娘さんを最期まで見届けるということは、大変苦しいことだと思った」と記述しており、《子どもに寄り添うことで培われる母親の信念を知ることができた》ことが導き出された。

1.2. サブカテゴリb.《家族の

辛さについては、子どもへの深い愛が支えとなってグリーンワークを行うことで、気持ちの整理ができることがわかった》について

学生は、「今回お話されるのはつらいことではないが、それをグリーンワークと考え癒しだと答えるのは様々な思いを受け止めてこられたのだと思った」「自分の大切な子ども(以下、Wちゃんとする)の別れを人前で話すことができるようになるまでに大変な苦労をしたのだらうと感じた」「親が子に対する気持ちはやはりすごいと思った」と記述しており、《家族の辛さについては、子どもへの深い愛が支えとなってグリーンワークを行うことで、気持ちの整理ができることがわかった》ことが導き出された。

2. カテゴリB.【死の重みの実感と

生の意味の体得】について

カテゴリB.【死の重みの実感と生の意味の体得】は、サブカテゴリa.《自分や身近な人の闘病・死別の経験を想起した》, サブカテゴリb.《心

表1 がんで子どもを亡くした母親の講演後における学生の感想の統合結果

【カテゴリー】	《サブカテゴリー》	記述されたデータ
A.【母親の講演内容と活動の意味の理解】(28枚)	<p>a. 《子どもに寄り添うことで培われる母親の信念を知ることができた》(13枚)</p> <p>b. 《家族の辛さは、子どもへの深い愛が支えとなってグリーフワークを行い、気持ちの整理ができることがわかった》(15枚)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・白血病になった娘さんを最期まで見届けるということは、大変苦しいことだと思った(10枚) ・迫りくる死に怯えて、相当な苦痛を持っていたと思う(3枚) ・親が子に対する気持ちはすごいと思った(7枚) ・今回お話しされるのはつらいことではないが、それをグリーフワークと考え癒しだと答えるのは様々な思いを受け止めてこられたのだと思った(4枚) ・自分の大切な子どもとの別れを人前で話すことができるようになるまでに大変な苦勞をしたのだらうと感じた(4枚)
B.【死の重みを実感することで生の意味を体得】(105枚)	<p>a. 《自分や身近な人の闘病・死別の経験を想起した》(12枚)</p> <p>b. 《心打たれる話を聴きながら自己の課題に気づき、前向きに生きていきたいという気持ちになった》(81枚)</p> <p>c. 《生の有限を知り、命の尊さを実感した》(12枚)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・祖父の2ヶ月余命の告知後、その現実を受け止めることができなかった(8枚) ・弟を亡くしました。私の両親もAさんと同じ状態だったのだと思と胸が痛む思いでした(2枚) ・叔母が亡くなる前に両親がまだ亡くなっていないのに葬式の話をして自分が自分の中で消化できていないが、ゆっくり考えていこうと思う(1枚) ・小学校でネフローゼで入院していた経験から患者側に立ったナースになろうと考えていたことを思い出した(1枚) ・私が同じような立場の時、そのようにできる自信がない。日々、心の中に子どものことを考えていても口にできない(11枚) ・なぜ看護師を目指しているのかということを変更して振り返ることができました(11枚) ・実際に聴いてみて、実際に聴いてみて、自分が想像しているものよりもはるかにつらいものであった(9枚) ・大切な体験談が聴けてよかったと思う(8枚) ・自分の課題が見つけれられたように思います(8枚) ・長い闘病のお話には本当にご苦勞様でしたと言いたいようなないくらい切なく感激も覚えた(5枚) ・これからの毎日を一生懸命、精一杯頑張ろうと励まされた(5枚) ・つらい話をしてくれてありがとうございました。私も頑張るのでお母さんも子どもの分まで一生懸命生きてほしい(5枚) ・幼いながらも色々なことを考え、一生懸命生きていたんだなあと感じました(4枚) ・母と子の会話で話が始まったので、情景がすごく浮かんできました(3枚) ・こんなにも家族の愛を感じられることはなかったのではないとも思った(3枚) ・Bちゃんも将来看護師になりたかったと聞いて、Bちゃんの方もしっかり夢を実現せたいと思った(3枚) ・今何が必要なのか、どんな言葉、行動が必要なのか、自分に問いかけて行動していきたい(2枚) ・多くの人に伝えてもらいたいお話でした(4枚) ・生まれた時からろうそくの長さが決まっているという言葉が印象的(3枚) ・人生は長さではなく、どう生きるのかという言葉が印象的(4枚) ・生きるということを改めて考えることができました(2枚) ・1日1日をもっと大切に過ごすことができると思いました(1枚) ・私には残された命がある自ら絶つなんて考えない(1枚) ・子どもと一緒に闘病生活を送った親たちは、いろんな感情や命の尊さを感じました(1枚)

表1 続き

<p>【カテゴリー】 C.【対象者の気持ちを中心とした援助システム作りの必要性】</p>	<p>《サブカテゴリー》 a.《医療のあり方を考え、展望を持った》(104枚) b.《養護教諭、看護師は、患児・家族の思いを理解した上で調整する役割を果たすことが大切であることがわかった》(26枚)</p>	<p>＜サブカテゴリーの一段階前＞・記述されたデータ ＜死にゆく患児・家族への医療のあり方を考えた(30枚)＞ ・家族の気持ちも受け止め、精神的ケアをすることも大切な役割だと教えて頂きました(10枚). ・病気の子どもたちを持つ親たちの感覚はすごく鋭く、医療者のちょっとした言動によって傷つき、怒り、とまどいが生まれる(6枚) ・体制が病院ごとに違うのだということを初めて知った(4枚) ・難病についての理解や関心をより深めていかなければならないと思った(4枚) ・子どもさんのQOLを大切にしていくことを学んだ(2枚) ・病態も考慮しつつ、今何が大切かを考えて母親や家族の納得のいく最期を迎えられるよう手助けしたい(2枚) ・看護師のちょっとした医療ミスによって患者が危機にさらされるのだと改めて実感した(2枚) ＜養護教諭、看護師としての展望を持った(63枚)＞ ・何か起きたとき、きちんと謝ることのできる患児や家族と同じ目線に立てる看護師になりたい(15枚) ・家族の気持ちを理解しながら患者のケアだけでなくその家族のケアもしっかり行なっていきたい(12枚) ・子どもの立場に立って行動ができ、子どもや家族からも信頼されるナースになりたい(12枚) ・養護教諭として人間として、できることを精一杯して入院されている子どもやその家族とかかわりをもち、信頼関係を大切に一緒に悩んで支えあって生きていきたいと思えます(11枚) ・どんな小さな子どもでも、納得のいく説明を受けるとがんばることを知り、看護師として必要だ(7枚) ・わたしの家族や大切な友達が難病になってしまったら、支え、励まして、一緒に病気に負けず闘っていけるだろうか(6枚) ＜告知に関する考えを持つ必要がある(11枚)＞ ・告知は難しい問題だ(3枚) ・自分の立場だったら必ず告知していたと思う(3枚) ・C県では小児の告知は慎重だと聞いて、県ごとに違うということがわかりました(2枚) ・告知の時、家族だけでなく学校側も一丸となってその子をアフターケアしていく大切さを学んだ(1枚) ・子どもに対する告知のタイミングも重要だと思った(1枚) ・告知に関しても親の考え方なども個々によってさまざま(1枚) ＜養護教諭はパイプ・調整役をすることが必要だとわかった(8枚)＞ ・医療機関と学校との連携をとっていくことが必要だと感じた(5枚) 子どもにとって学校が楽しい場であると感じられるためには、先生や養護教諭の協力が必要不可欠なものだ(3枚) ＜ナースはケアリングしながらリエゾン的役割をすることが必要だとわかった(11枚)＞ ・養護教諭として人間として、できることを精一杯して入院されている子どもやその家族と関わりを持ち、信頼関係を築くことが大切だ(3枚) ・患者・患者のご家族の心の声に耳を傾けることが大切だと感じました(3枚) ・看護師は患者と家族との間のパイプ役だということに改めて気づかされた(3枚) ・病院の人はすごく大事な存在だ。言葉には気をつけなければ・・・(2枚) ＜不安や恐怖は話を聴くことで軽減できることがわかった(7枚)＞ ・どんなに忙しくても患者や家族の話を聞き、不安を和らげる人でありたい(3枚) ・奇跡を起こしたいという気持ちと心の葛藤をしている気持ちの2人の自分がいる(2枚) ・母親が医療の質問をしても詳しい説明をしてもらえず、大きな不安と恐怖を抱えながら治療をしていた(1枚) ・看護師の言葉で患者や家族の方の心境は全然違ってくるんだなあと実感した(1枚)</p>
--	--	---

打たれる話を聴きながら、自己の課題に気づき、前向きに生きていきたいという気持ちになった》、サブカテゴリー c .《生の有限を知り、命の尊さを実感した》から構成されていた。

2 .1 .サブカテゴリー a .《自分や身近な人の闘病・死別の経験を想起した》について

学生は、「叔母が亡くなる前に両親がまだ亡くなっていないのに葬式の話をして自分がの中で消化できていないが、ゆっくり考えていこうと思う」「祖父の2ヶ月余命の告知後、その現実を受け止めることができなかった」と記述しており、《自分や身近な人の闘病・死別の経験を想起した》ことが導き出された。

2 .2 .サブカテゴリー b .《心打たれる話を聴きながら自己の課題に気づき、前向きに生きていきたいという気持ちになった》について

学生は、「幼いながらも色々なことを考え、一生懸命生きていたんだなあと感じました」「小学生くらいの子でも病気の理解をよくしている。大人以上に受け入れる力があるのかなあと感じた」「Wちゃんはつらいはずだけど、小さい子どもながら両親のことをよく考えてすごいと思いました」「母と子の会話で話が始まったので、情景がすごく浮かんできました」「こんなにも家族の愛を感じられることはなかったのではないかとも思った」「実際に聴いてみて、自分が想像しているものよりもはるかにつらいものであった」と記述していた。

また学生は、「私が同じような立場の時、そのようにできる自信がない。日々、心の中に子どものことを考えていても口にできない」「いくらたっても心の傷は完全には癒えないだろうと感じた」「大切な体験談が聴けてよかったと思う」「長い闘病のお話には本当にご苦労様でしたと言いたいくらい切なく感激も覚えた」「自分の課題が見つかったように思います」「これからの毎日を一生懸命、精一杯頑張ろうと励まされた」「今何が必要なのか、どんな言葉、行動が必要なのか、自分に問いかけて行動していきたい」「自分が病気になって、看護師を目指そうと思いました」「小学校でネフローゼで入院していた経験から患者側に立ったナーになろうと考えていたことを思い出した」「なぜ看護師を目指しているのかということを変更して振り返ることができました」「Wちゃんも来看護師になりたかったと聞いて、Wちゃんの方もしっかり夢を実現させたいと思った」「多くの人に伝えてもらいたいお話でした」「つらい話をしてくれてありがとうございました。私も頑張るのでお母さんも子どもの分まで一生

懸命生きてほしい」と記述しており、《心打たれる話を聴きながら自己の課題に気づき、前向きに生きていきたいという気持ちになった》ことが導き出された。

2 .3 .サブカテゴリー c .《生の有限を知り、命の尊さを実感した》について

学生は、「生まれた時からろうそくの長さが決まっているという言葉が印象的」「死が近いということをもっと感じていたのではないかと思う」「人生は長さではなく、どう生きるのかという言葉が印象的」「生きている長さではなく、どう生きているかという言葉が心に残っている」「生きるということを改めて考えることができました」「1日1日をもっと大切に過ごすことができました」「私には残された命がある。自ら絶つなんて考えない」「子どもと一緒に闘病生活を送った親たちは、いろんな感情や命の尊さを感じると実感した」と記述しており、《生の有限を知り、命の尊さを実感した》ことが導き出された。

3 . カテゴリー C .【対象者の気持ちを中心にした援助とそのシステム作りの必要性】について(表1)

カテゴリー C .【対象者の気持ちを中心にした援助とそのシステム作りの必要性】は、サブカテゴリー a .《医療のあり方を考え、展望を持った》、サブカテゴリー b .《養護教諭、看護師は、患児・家族の気持ちを理解した上で調整する役割を果たすことが大切であることがわかった》から構成されていた。

3 .1 .サブカテゴリー a .《医療のあり方を考え、展望を持った》について

学生は、「告知は難しい問題だ」「自分の立場だったら必ず告知していたと思う」「告知の時、家族だけでなく学校側も一丸となってその子をアフターケアしていく大切さを学んだ」「子どもに対する告知のタイミングも重要だと思った」「告知に関しても親の考え方なども個々によってさまざま」「C県では小児の告知は慎重だと聞いて、県ごとに違うということがわかりました」「体制が病院ごとに違うのだということを知った」「子どもさんのQOLを大切にしていくことを学んだ」と記述しており、告知に関する考え方を学ぶ必要があることが導き出された。

また学生は、「医療を行う中で何らかのミスがあった時には、患者本人とその家族にしっかり謝罪と説明をすることが大切だ」「何か起きたとき、きちんと謝ることのできる患児や家族と同じ目線に立てる看護師になりたい」「どんな小さな子どもでも、納得の

いく説明を受けるとがんばることを知り、看護師として必要だ」「わたしの家族や大切な友達が難病になってしまったら、支え、励まして、一緒に病気に負けず闘っていけるだろうか」「難病についての理解や関心をより深めていかなければならないと思った」「家族の気持ちも受け止め、精神的ケアをすることも大切な役割だと教えて頂きました」と記述しており、養護教諭、看護師としての展望を持ったことが導き出された。

さらに学生は、「病態も考慮しつつ、今何が大切かを考えて母親や家族の納得のいく最期を迎えられるよう手助けしたい」「病気の子どもたちを持つ親たちの感覚はすごく鋭く、医療者のちょっとした言動によって傷つき、怒り、とまどいが生まれる」「看護師のちょっとした医療ミスによって患者が危機にさらされるのだと改めて実感した」「家族の気持ちを理解しながら患者のケアだけでなくその家族のケアもしっかりしていきたい」と記述しており、「医療のあり方を考え、展望を持った」ことが導き出された。

3.2. サブカテゴリー b 《養護教諭、看護師は、患児・家族の気持ちを理解した上で調整する役割を果たすことが大切であるとわかった》について

学生は、「子どもにとって学校が楽しい場であると感じられるためには、先生や養護教諭の協力が必要不可欠なものだ」「養護教諭として人間として、できることを精一杯して入院されている子どもやその家族と関わりを持ち、信頼関係を築くことが大切だ」「医療機関と学校との連携をとっていくことが必要だと感じた」と記述しており、養護教諭はパイプ・調整役をすることが必要だとわかったことが導き出された。

また学生は、「患者・患者のご家族の心の声に耳を傾けることが大切だと感じました」「病院の人はすごく大事な存在だ。言葉には気をつけなければ・・・」「母親が医療の質問をしても詳しい説明をしてもらえず、大きな不安と恐怖を抱えながら治療をしていた」「看護師の言葉で患者や家族の方の心境は全然違って来るんだなあ実感した」「看護師は患者と家族との間のパイプ役だということに改めて気づかされた」と記述しており、看護師はケアリングしながらリエゾンの役割を果たすことが必要だとわかったことが導き出された。

学生は、「どんなに忙しくても患者や家族の話聞き、不安を和らげる人でありたい」と記述しており、不安や恐怖は話を聴くことで軽減できることがわかったことが導き出された。

さらに学生は、「奇跡を起こしたいという気持ち

と心の葛藤をしている気持ちの2人の自分がいる」「親は2人の自分がいたのではないかと思う」と記述しており、死にゆく患児・家族への医療のあり方を考えたことが導き出された。

学生は、「医療機関と学校との連携をとっていくことが必要だと感じた」「看護師は患者と家族との間のパイプ役だということに改めて気づかされた」「看護師の言葉で患者や家族の方の心境は全然違って来るんだなあ実感した」と記述しており、「養護教諭、看護師は、患児・家族の気持ちを理解した上で調整する役割を果たすことが大切であるとわかった」ことが導き出された。

考 察

1. 講演後の感想について

以下、本研究によって抽出された講演後の感想における3つのカテゴリー(表1)について述べる。

1.1. カテゴリー A【母親の講演内容と活動の意味の理解】について

学生は子どもに白血病の症状が発現してから、子どもの死後、母親が人間としての成長するまで、時間の経過にそって死にゆく子どもと家族、特に母親は、「一分一秒でも長く生きてほしい」といった希望と、目の前の子どもの苦しむ姿を見て「早く楽にさせてあげたい」といった気持ちが混在しているといった複雑な思いも理解した。アール・A・グロルマンは、「早く死んで楽になってほしいと思った後に罪悪感にかられる」¹⁰⁾と述べている。学生は、子どもに対する深い母親の愛が、このようなアンビバレンツな気持ちを生むのだという母親の苦悩が理解できたと考える。

養護教諭は学校において、がんを発症する前から子どもと関わりを持っているが、症状が発現してからは子どもの心身をケアし、他の生徒や教員、家族等の調整(リエゾン)的役割を担うことになる。その時にがんの子どもを持つ母親の複雑な気持ちを知り、適切なケアを提供することが求められる。母親が子どもの死を頭だけではなく身体で理解し、死までの時間を大切に、良い思い出を多く作ることは死の悲嘆からの回復に役立つため、養護教諭はこのことを理解して子どもの死までの限られた時間を、親子にとって意味ある時間として大切に過ごせるよう配慮が必要であることを感じたと考えた。

さらに学生は、わが子を失った親の悲嘆は、なくさめられないほどに深く、悲しく、救いたいものであり¹¹⁾、自分たちに話すことはつらいことだと思っていたため、母親の「幸せである」という言葉に

驚きの感想を述べていた。ハーヴェイは、「子どもを失った母親が、子どもの死を嘆いている親たちのために団体に対して講演を行うことが母親自身の悲嘆を癒す仕事である」¹²⁾と述べており、Tさんにとって子どもの死の話をするのがグリーンワークであり、子どものことだけを考えていられる幸せな時間であるという現在行っている活動の意味がわかったと学生は感じていたと考える。

1.2. カテゴリーB.【死の重みの実感と生の意味の体得】について

学生はがんで子どもを亡くした母親の話を書くことで、自分が家族や親族の病気の告知を受けた経験を想起し、否認し、辛い気持ちのままの自分を見つめ直していた。西本は、近頃の子どもたちは、「死」を知らないがために、近しい人の突然の死に対応できず、心的外傷がいつまでも残る危険性があることを指摘している¹³⁾。自分自身の心的外傷をそのままにしておくと、人の死に直面するとフラッシュバックして患者や家族のケアが不十分になる可能性があることを指摘している。人の死に直面する可能性のある養護教諭を希望する学生にとって、自分自身の心のケアは大きな課題であり、今後さらに検討が必要であると考えられる。

また学生は、自分のつらい経験を思い出すだけでなく、自己の課題、命の尊さを実感し、前向きに生きていきたいという気持ちになっていたと考える。菊井は、死にゆく過程の苦しさ、辛さ、死の恐怖等に触れる機会がない今、実際に体験した人の気持ちに触れる授業の大切さを実感し、今後もこのような死、生をみつめ直し、対象者の気持ちの理解を促す授業が必要である¹⁴⁾と述べている。死の教育は、生の教育であり、生命の有限を実感することで命の大切さや自己の課題も見えていた。このことから今回の授業は、学生に自分の生について考え、新たな課題を見つけるといった学習効果があったと考える。

1.3. カテゴリーC.【対象者の気持ちを中心とした援助とそのシステム作りの必要性】について

学生は、親子の病への感受性は鋭く、医療者側の何気ない発言は、家族を傷つけ、心理的な衝撃を与えると感じていたと考える。今後、学生が自分や患児、その家族に与える影響を考え、より良いケアが提供できるようになるためにも、意識して講演が聴けるように、今回のような教育が必要であると考える。

また学生は、自分の子どもが医療ミスの被害に遭った時、患者・家族は「事実を知りたい」「原因を知りたい」「病院は再発防止策を実施してほしい」

という願いを持って¹⁵⁾いることを理解した。さらに説明の一部として、患者・家族は医療者の謝罪を切望しているが、医療者は敗北感を感じて動揺したり、患者や家族に対して防衛的になり、接触を避けようとしたり強圧的な態度をとりがちになり^{16,17)}、そのような態度は患者や家族を傷つけ、医療スタッフに対する不信感を強めることを学生は理解したと考える。

学生は、患児が小さいながらも病気を理解・受け入れ、精一杯生きていること、死の予測ができることを知った。さらに学生は、患児が自分のことだけではなく、両親のことをよく考えていると感じていた。何ヶ月も入院している子どもは、ふつう、保護された環境に生活している子どもたちより急速に心理的に成長し、成熟していくと言われる¹⁸⁾。そのため自分のことばかりでなく、母親のことなど周囲の人たちのことを心配したりする。養護教諭や看護師が母親をサポートし、母親が精神的安寧を得られることは、母親を心配している患児をサポートすることにつながることを感じたと考えられる。

学生は対象者であるがんの子どもと親の生きている意味を充実させるような援助をしたいと考えており、そのために患者・家族のニーズの把握をすること、影響力の強い医療者の言動に十分注意しながらインフォームド・コンセントを行うことの重要性、子どもへの告知の難しさを感じていたと考える。上記に述べたように、死を迎えるまでの間、子どものために何かができたいという思いは、親の痛みを和らげることにつながり、子どもを亡くした親の悲嘆過程でも、悔いのない愛情を伝えられるケアができたと思えることは、悲嘆過程を支える重要な要素になる¹¹⁾。近年、子どもに対する十分な説明と同意を得る、インフォームド・コンセントの必要性が叫ばれているが、わが国での取り組みは欧米と比べて不十分であると言われている。藤井は、「患児に告知すると反応は比較的冷静で、かえって医療者や両親との意思の疎通が良くなり親密になったり、検査や治療に積極的になった」¹⁹⁾と述べており、十分に家族にICを行い、子どもにも告知を行って家族と患児がよりよい療養生活を送り、死を迎える準備ができるよう、サポートしていくことが必要であることを学生は感じていたと考える。そして告知をする際には、子どもと母親の告知を受け入れる心の状態を把握するなどタイミングや個別性を重視し、告知する医師と患者側との県民性の違いによって考え方が違うことも考慮して告知は行われるべきであること、告知をする際には周囲のサポートが不可欠であること、看護師は患者・家族と他職種との関係の調整を図るとい

うパイプ役を担う必要があること、看護師は親に尋ねながら丁寧な言葉づかいで説明することが大切であり、尊重することからケアは始まるということを学生は理解していたと考える。

そして学生は、どんなに忙しくても患者・家族の話をお聴きすることが大切であり、心のうちを開示することによって不安や恐怖が軽減することを学生は理解していたと考えられる。その際学生は、子どものQOLを考えた個を尊重した援助が必要であることを理解していた。つまり学生は、患児のQOLを高め、人間らしい死を迎えられるよう援助することの重要性を理解していたと考える。

また学生は、上記でも述べたように、医療従事者にはやすらかな死を迎えさせたいという気持ちと、少しでも長生きしてほしいといった2つの気持ちのある家族に対応することが必要であり、また患者と家族をひとつのシステムとしてとらえ、家族を“第二の患者”として十分認識した上で、患者家族双方を視野に入れた精神的ケアを心がける必要がある。それには学生自身、自分の心を育てていくことが必要⁴⁾である。今後、学生の死生観の確立や他者の多様な死生観の理解、共感性を高める教育が必要であると考えられる。

さらに学生は、上記のような対応を病院だけに求めるのではなく、養護教諭や教員もサポートしていくべきであるという患者・家族と他職種とのパイプ・調整役を担う必要があることを理解した。養護教諭は学校において、がんを発症する前から子どもと関わりを持っているが、症状が発現してからは心身ともにケアをし、他の生徒や教員、家族等の調整(リエゾン)的役割を担うことになる。子どもが疾患に罹患してからは家族、医師、看護師と連携して病について理解し、子どもが楽しく学校生活を送れるよう橋渡し役をすることが大切であることを理解していた。がんの子ども、家族の気持ちを理解し、楽しい学校生活を送ることはがんの子ども、家族、友達にとって楽しい思い出を作ることになり、それがひいては母親の死後の悲嘆の回復にも寄与することができる養護教諭の重要な仕事であるということを学生は理解していたと考える。また家族がケアに参加できるよう、十分に説明、サポートを行う必要がある、このことは家族が患者に何かすることができたといった感情を高め、死後の悲嘆の回復に役立つ重要なケアであること、養護教諭は、家族を第二の患者としてよく話を聴く、他職種とのパイプ・調整役を行う等のサポートをすることの大切さなど、養護教諭の役割について学んだと考える。

2. 養護教諭養成課程での

死の教育の必要性について

学生は、今回の講演によって実際に対象者の辛い、苦しい気持ちに触れ、自分が目指す職業の責任の重さを感じ、さらには死を学ぶことで生を実感し、命の尊さを感じた。このことから養護教諭養成課程における対象者の苦悩を理解の大切さを改めて認識する。

さらに養護教諭は、子どもの心理的成長を理解し、QOLを高め、個を尊重したケアを実施することが大切であり、そのためには子ども、家族に信頼される接し方が大切であり、自分たちが目指す職業が与える影響の大きさを学ぶことができたと思う。

今回の調査は、子どもが入院する前から子どもの死後までどのような関わりをしたいのかといったことが感想として述べられていた。筆者らは先行研究で、今回の講演を聴いた学生が、養護教諭や看護師になった時にどのような援助が望まれるのかということをも具体的に知りたいと思っていることを明らかにしたが¹⁵⁾、実際に話を聴くことといった技術的なことだけではなく、対象が今、ここで、どんな気持ちでいるのかを理解することの大切さを学んでいたと考える。これは、母親が、がんの子どもの運命を共に引き受け、闘っている家族の苦悩をより理解し、本質的な支援をしたいという、学生の意識が伺える。さらに学生は、症状発現からターミナル期、退院後にもケアが必要であり、連続した看護を提供する必要があると感じていたと考える。養護教諭は、子どもが亡くなるとその後の母親のフォローはほとんどできていないのが現状であり、遺族ケアサービスは、一部のサポートグループのみが行っているのが現状である。今後、さらに学校や病院内で関わっている間の患者本人だけのケアではなく、子どもの死後の家族に対応できるよう、複雑な家族の気持ちを理解できるような教育を行っていくことが必要である。

おわりに

本研究の目的は、養護教諭養成課程の学生が、がんで亡くなった子どもをもつ母親の講話を聞き、どのように感じ、考えたのかを明らかにすることにより、今後の養護教諭希望者の死の教育方法に示唆を得ることであった。そしてKJ法による分類の結果、【母親の講演内容と活動の意味の理解】【死の重みの実感と生の意味の体得】【対象者の気持ちを中心にした援助とそのシステム作りの必要性】を理解したことが明らかになった。

また限界として、本学学生に対する死の教育とい

う限られた対象におけるものであり、一般化を図るには偏りが生じる可能性があることは否めないと考えられる。しかし、今回の調査を通して、今まであまり学校現場において行われてこなかった死の教育を、養護教諭養成課程の学生に行い、その感想から対象者の気持ちに触れることの大切さ、自己の課題、命の大切さ等が、養護教諭、看護師に求められるとの認識が明らかになった。今後、この研究結果を授業の中で学生にフィードバックし、教員と学生が学び合う機会を設け、学生の感想を深めることにつなげていきたいと考える。

謝辞

養護教諭養成課程において講演をしていただきましたが、
んの子どものを守る会 広島県支部代表者 浦田美沙子様、
本研究の趣旨をご理解いただきました調査対象者の皆様に
深く感謝いたします。

付記

本研究の一部は、第8回日本地域看護学会学術集会にお
いて発表した。

文 献

- 1) 山崎裕二：看護・医療系短大等における「死の教育学」の実践(1) —「死に関する看護・医療系学生の意識調査」の授業への導入—。日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 15, 89-96, 2002。
- 2) アルフォンス・デーケン：死とどう向き合うか, 第1版, 日本放送出版協会, 東京, 1996。
- 3) 斉藤章代：いのちをうけて、生と死から学ぶいのちの教育, 現代のエスプリ394, 至文堂, 98-105, 2000。
- 4) 平田美佳：再発した子どもと家族をチームで支えるケア；子どもと家族・看護師・医師がともにケアに携わっていくために, 小児看護, 24(3), 340, 2001。
- 5) 佐伯俊成・山脇成人：がん患者とその家族に対する心理社会的介入, 医学のあゆみ, 205(12), 903, 2003。
- 6) E・キューブラー・ロス：患者の家族。鈴木晶訳, 死ぬ瞬間 死とその過程について, 第1版, 読売新聞社, 東京, 231, 1998。
- 7) 川喜田二郎：KJ法, 中央公論社, 東京, 10-20, 121-170, 1991。
- 8) 川喜田二郎：発想法, 中公新書, 東京, 4-32, 1993。
- 9) 舟島なをみ：質的研究への挑戦, 医学書院, 東京, 24-31, 84-97, 1999。
- 10) アール・A・グロルマン：重兼裕子訳, 死ぬってどういうこと？子どもに「死」を語る時, 第1版, 春秋社, 東京, 95-96, 1992。
- 11) J・H・ハーヴェイ：和田実・増田匡裕編訳, 加藤司訳, 喪失体験とトラウマ —喪失心理学入門—, 第1版, 北大路出版, 京都, 45, 2003。
- 12) J・H・ハーヴェイ：和田実・増田匡裕編訳, 加藤司訳, 喪失体験とトラウマ —喪失心理学入門—, 第1版, 北大路出版, 京都, 47, 2003。
- 13) 西本義之：「死」を考える学習—地域の実情に合わせて, 生と死から学ぶいのちの教育, 現代のエスプリ, 394, 至文堂, 東京, 49, 2000。
- 14) 菊井和子：命の教育再考 エリザベス・キューブラー・ロスの死を悼んで, 看護教育, 45(12), 1086-1089, 2004。
- 15) 加藤良夫：医療過誤から患者の人権を守る ぶどう社, 東京, 1993。
- 16) 加藤良夫：医療事故対策, 日本病院会雑誌, 46, 39-48, 1999。
- 17) J・H・ハーヴェイ：和田実・増田匡裕編訳, 加藤司訳, 喪失体験とトラウマ —喪失心理学入門—, 第1版, 北大路出版, 京都, 38, 2003。
- 18) 藤井裕治：がんを病む子どもたちへのデス・エデュケーション, 生と死から学ぶいのちの教育, 現代のエスプリ, 394, 至文堂, 東京, 167, 2000。

(平成17年10月31日受理)

**Students' Impressions after Mother Who Lost Her Child to Cancer Gives a
Lecture-collection and Classification of Free Description**

Etsuko NIIYAMA , Kyoko KAJIWARA and Sawayo TADATSU

(Accepted Oct. 31, 2005)

Key words : nurse-teacher training course , death education , story of the child's death

Correspondence to : Etsuko NIIYAMA

Department of Nursing , Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

E-Mail: niiyama@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.2, 2006 645-654)